

【3】生徒の実態

本年度も、指導を展開するにあたり、生徒一人ひとりの学習課題を明らかにするための実態把握は、比較対照しやすい利点から、昨年度までと同様の検査・調査を実施した。調査結果から、個人および高等部全体の傾向や留意点を探り、指導に生かしていくことにした。また、各実態調査の結果は、指導前と指導後と比較するための基礎資料とするため、できるだけ毎年継続していきたい。

高等部という学部独自の性から、間近に控えた『社会参加・社会的自立』を意識した、「生きる力」を高める指導が教育活動の主流となるが、その中でも、特に、将来の「生活を楽しむ姿」を念頭に、それが実現できるような具体的手だてを検討することとした。

(1) 集団編成

表-2 高等部の集団編成

学年	生徒		担任		主な障害	本校への入学時期
	男	女	男	女		
1年	8	0	1	1	<ul style="list-style-type: none"> ・自閉的傾向 ・てんかん ・脊柱側湾症 ・ダウン症 ・感覚統合不全 	小学部 ~2人 中学部 ~5人 高等部 ~1人
2年	6	2	1	1	<ul style="list-style-type: none"> ・脳性麻痺後遺症 ・水頭症 ・自閉的傾向 ・てんかん ・プラダーウィリー 	小学部 ~3人 中学部 ~4人 高等部 ~1人
3年	7	3	0	2	<ul style="list-style-type: none"> ・ダウン症 ・てんかん ・二分脊椎分離症 ・自閉的傾向 ・プラダーウィリー ・筋緊張亢進症 	小学部 ~2人 中学部 ~3人 高等部 ~5人
計	26		級外4		入学時期：小学部~7人 中学部~12人 高等部~7人	

今年度、26名の高等部の基礎（学級）集団の編成は、表に示すとおりである。その内、小学部および中学部からの連絡入学生が19人と7割以上に上り、養護学校という行き届いた援助の中で生活を送ってきたためか、高等部の生徒は全体的に雰囲気も明るく穏やかであるように思われる。しかし、本校の高等部に入学してきた、一般の中学校の障害児学級に在籍していた生徒は、小集団の中で、主として教科学習を中心に学習してきており、基礎学力の面では多少優れているが、生活経験や、自信を持って生き生きと活動した経験に乏しく、自主的に人と関わるのが苦手で、他からの働きかけを待つ傾向がみられる。そして、自分づくりの段階では、自己客観視の芽生えを迎える生徒が多い。

本校は『社会的自立』を、「自分の障害を受容し、援助を受けながら、人間らしく生き生きと幸福を追求していく姿」ととらえ研究を進めているが、今年度はじめて、本校の卒業生128名に対して、往復はがきを使って実態調査を行った結果、回収率31.25%(40名)で、3分の1に満たなかった。様々な要因があるものと思われるが、このことは、卒業後の『社会的自立』が、非常に困難な状況にあることの現れである。今後、より一層、豊かな生活経験を与える場の保障に努めるとともに、「生きる力」をどうとらえて指導にあたるのかを、今後も大きな課題として取り組んでいかなければならない。

(2) 本校卒業生の実態（平成8年10月調査実施 128名中40名回収）

図-1 学校生活で一番楽しかったこと

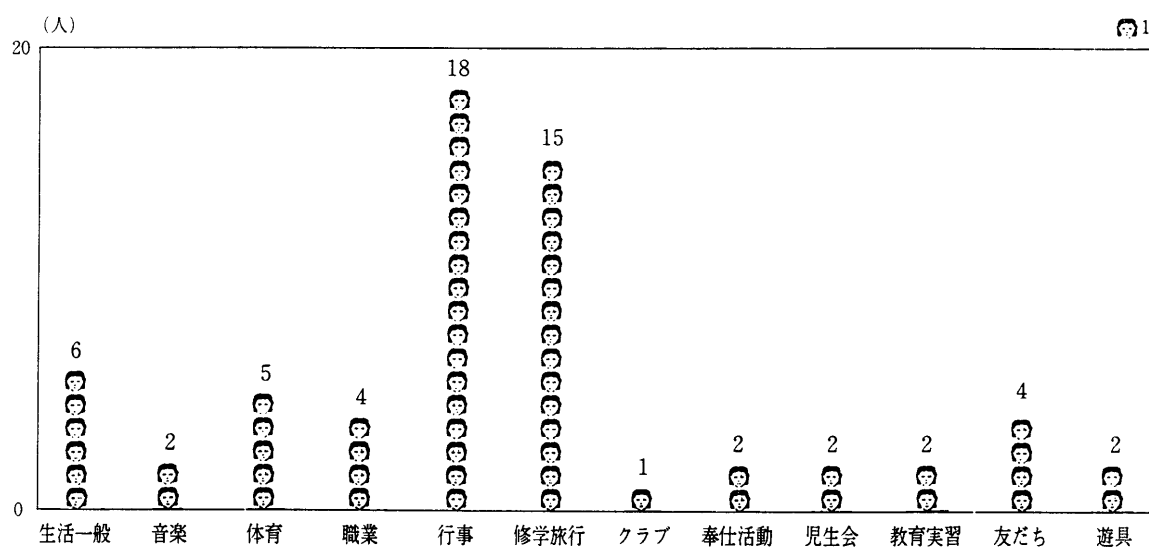
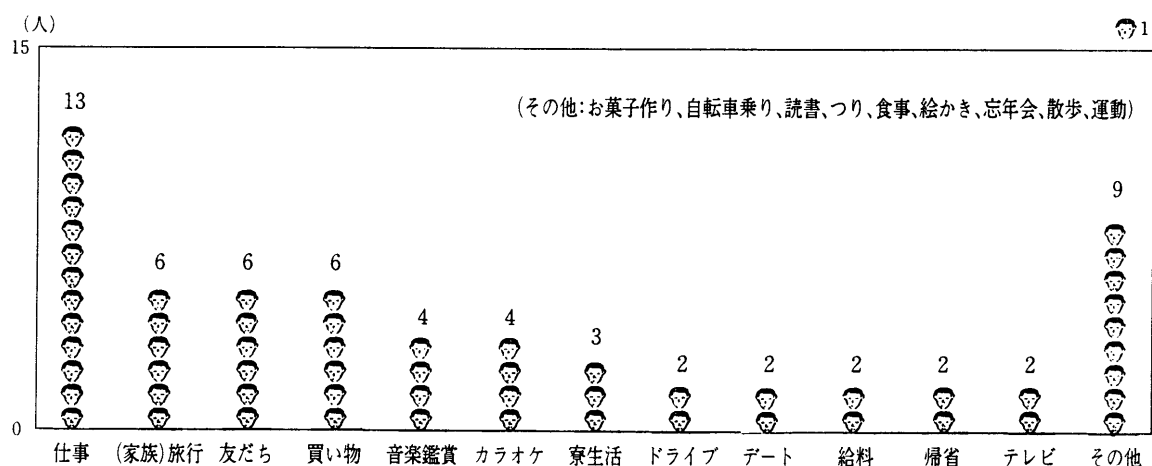


図-2 卒業後の生活で一番楽しいこと

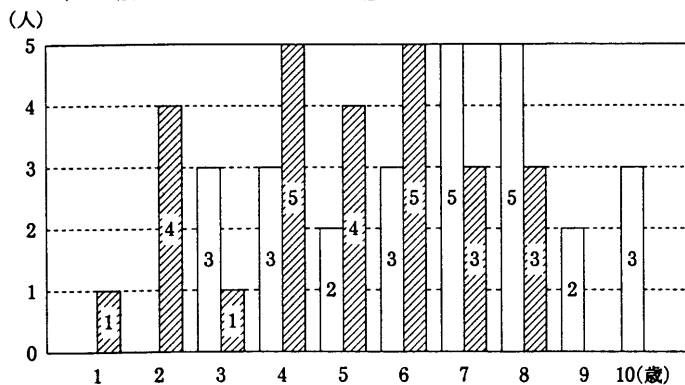


卒業生にとって、学校生活で、一番楽しかったこと、思い出深かったことは、学校・学部行事(52.4%)、中でもとりわけ修学旅行(23.8%)で、ある程度予想していた通りの結果であった。しかし、普段の学校生活全般における教育課程への印象が、思いのほか低かった(28.6%)のが残念である。行事やそれに含まれる修学旅行などは、ある程度受動的な姿勢であっても楽しみや満足感を与えてくれる。しかし、それらは学校生活のごく一部でしかなく、実際には、日々の教育課程全般が、それをしのぐ楽しみや成就感を与える場でなければならない。また、卒業後の生きがいについても、「仕事」のみを挙げている卒業生も多い。(25.5%)この事実をどうとらえるかは、賛否両論分かれるところであるが、その他の回答にも、受動的なものが多く見られる。

このような実態のなか、学校教育により、より一層「生活を楽しむ力」を身につけていくことが望まれる。そして、卒業後の生活でも、援助者があり、適切な支援によって『社会的自立』が推し進められるような、社会保障の充実が求められる。

(3) 諸検査による生徒の実態

図-3 S-M社会生活能力検査及び田中ピネー知能検査
(S-M社会生活能力検査は平成8年5月実施、田中ピネー知能検査は入学時に実施)



□ S-M社会生活能力検査
▨ 田中ピネー知能検査

【諸検査の結果から】

高等部の生徒は、S-M社会生活能力検査では、社会生活年齢(SA)が3歳0か月から10歳8か月までと、実に幅が広い。そして、領域別に著しいバラつきがある生徒が多い。特に他の領域に比べ、全体的に集団参加や意志交換の力が落ち込んでいる生徒が目立つが、作業面はよい傾向にある。

田中ピネー知能検査による精神年齢(MA)と社会生活年齢とを比較してみると、豊かな生活経験や周囲の適切な指導によって、SAが引き上げられている生徒がいる一方、できる力は持ちながらも十分に生かされず、MAに比べSAが伸びていない生徒も見受けられた。

WISC-R知能検査結果では、言語性IQが45を上回る生徒は4名、動作性IQが45を上回る生徒は8名しかなく、全体的に動作性IQが言語性IQより高い。また、測定不能の生徒も3名あった。このような実態から、指導にあたっては、視聴覚に訴える教材・教具を工夫するとともに、個に応じたきめの細かい支援が必要となってくる。

WISC-R知能検査結果では、言語性IQが45を上回る生徒は4名、動作性IQが45を上回る生徒は8名しかなく、全体的に動作性IQが言語性IQより高い。また、測定不能の生徒も3名あった。このような実態から、指導にあたっては、視聴覚に訴える教材・教具を工夫するとともに、個に応じたきめの細かい支援が必要となってくる。

(4) 「生活を楽しむ」視点から見た生徒の実態

「生活を楽しむ」についての意識を探るために、高等部の生活についてのアンケートを実施し、次のようなことが分かった。家庭では、「テレビを見る」「音楽を聞く」ことが楽しいと答える生徒が多く、一人で過ごすことが多いようである。また、余暇の利用の仕方が限られがちで、地域・社会とのつながりも薄い様子が感じられる。さらに、生徒たちが楽しいと感じる時について調査し、その理由についてまとめると次のようであった。

- 禁止場面や制限が少なく、リラックスでき、開放される時。
- 活動自体が楽しめる時。没頭できる時。
- 自分の好きな活動ができる時。得意で、簡単な活動をしている時。
- 知らなかったことを知る喜びがある時。新しい経験の拡がり、挑戦がある時。
- みんなでできる喜びがある時。友だちと一緒に活動できる時。人が楽しんでいるのを見て、何となく自分も楽しい時。
- 人間関係の拡がりがある時。
- 活動に価値を見いだせる時。

このアンケートから、高等部の生徒たちが楽しいと感じる時や理由は、歌を歌う・何かを作る等、活動自体が楽しい生徒から、卒業してから役に立つ・奉仕作業はきれいになるし人の役に立つから等、活動に価値を見いだす生徒まで様々であることが分かった。また生徒たちが楽しむ姿には、一人ひとりの内面の育ちが深く関わっている様子が浮かび上がってきた。そこで、一昨年度までの、コミュニケーションに視点をあてた研究で大切にしてきた自分づくりの段階が、今回、生徒一人ひとりの「生活を楽しむ姿」を考える上でも手がかりとなると考え、生徒の目指す具体的な姿を次のような段階でとらえてみた。

表-4 自分づくりの段階表

	1年	2年	3年	めざす具体的な姿
自己客観視 (9歳～)				<ul style="list-style-type: none"> 自分を多面的にとらえ、理想像をイメージしながら「～だから～だ」と根拠のある考えを持つ。 活動することの価値が分かり、目的意識を持って取り組み、その過程も楽しむ。
自己客観視の 芽生え (5歳後半)	C男 H男		Q男 S男	<ul style="list-style-type: none"> 経験をもとに見通しを持ちながら、自分の考えをまとめる。 集団の中での自分の立場が分かり、役割を果たすことに喜びを見いだす。 かなり先のことで楽しみをしながら、それに向かって段取りを組む。
・自分づくりの始まり	D男	O男 A子 B子	V男 C子 D子	<ul style="list-style-type: none"> 「もっと～したほうがよい」と自分なりに考える。 集団の中の一員としての自分が分かり、協調しながら活動を楽しむ。 かなり先のことで楽しみをしながら、それに向かって頑張る。人のことをしてあげて喜んでもらう。
自制心の形成	B男 F男 G男			<ul style="list-style-type: none"> 「～だけ～しよう」という意思を持つ。 周囲の評価を期待しながら意欲的に活動し、ほめられて満足感を味わう。 設定された場面では、自分の気持ちをコントロールしながら活動を楽しむ。
自制心の芽生え (3歳後半)	E男	I男 J男 N男	P男 U男 E子	<ul style="list-style-type: none"> 「～がしたい」という意思を持つ。 周囲の状況や評価に影響されやすいが、自分なりに活動を楽しむ。 少し先のことを楽しみをしながら、今の活動を頑張る。
自制心の 拡大・充実 (3歳前半)	A男	M男	R男 T男	<ul style="list-style-type: none"> 選択肢の中から「～ではない～だ」と自分の思いを持つ。 設定されなくても自分の好きなことに生き生きと取り組み、活動を拡げていく。 周囲への意識は乏しいが、自分なりの楽しみを持っている。 自分の思いを十分ではないが、言葉で伝える。 少し先のことを楽しみにする。
自我の誕生 (1歳半)		K男		<ul style="list-style-type: none"> 2～3の選択肢の中から自分で選んで「～だ」という思いを持つ。 自分の好きなことに援助を受けながら生き生きと取り組み。 目の前の活動に対し「～がしたい」という気持ちを持ち、活動そのものを楽しむ。 自分の思いを言葉や態度で表す。

※本校研究紀要第15集「自己内対話による自分づくりの段階表」をもとに作成

このように、生徒たちはさまざまな自分づくりの段階にあり、「生活を楽しむ姿」をそれぞれの段階に応じた指導で追求していくことを研究課題とし、取り組んでいくことで、間近に迫った『社会参加・社会的自立』への一助としていきたい。(宮脇)